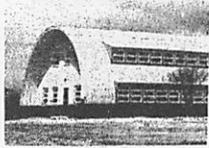


# 九条はらまち

福島県南相馬市「はらまち九条の会」 No. 194

2012(平成24)年 8月 6日(月)発行



カマボコ型の  
広島ABCC

<1945(昭和20)年8月6日、8時15分、広島に史上初の原子爆弾投下の日>  
●アメリカは原爆投下前、緻密に計画的に広島を調べあげ、投下後もさまざまな膨大なデータを集めています●マンガ『はだしのゲン』にも登場しますが、広島の比治山にあったABCC(原爆傷害調査委員会)は、人体に及ぼす放射能の影響の調査だけで治療はしませんでした●現在、原発事故で被曝量の調査だけで治療もしない国や政府や県の対応は、まるでこのABCCのようです●米軍の「汚染地図」も、アメリカならではのデータ作成です。

## ■水俣と福島に共通する10の手口■

- 1、誰も責任を取らない／縦割り組織を利用する
- 2、被害者や世論を混乱させ、「賛否両論」に持ち込む
- 3、被害者同士を対立させる
- 4、データを取らない／証拠を残さない
- 5、ひたすら時間稼ぎをする
- 6、被害を過小評価するような調査をする
- 7、被害者を疲弊させ、あきらめさせる
- 8、認定制度を作り、被害者数を絞り込む
- 9、海外に情報を発信しない
- 10、御用学者を呼び、国際会議を開く

## <大震災からもう1年半>

### 「福島第一原発は水俣病と似ている」

約30年間脱原発を訴え続けている

アイリーン・美緒子・スミスさん

アイリーン・美緒子・スミスさんは、写真家ユージン・スミスさん(78年死去)と共に水俣病を世界に知らせた活動家で、さらに京都を拠点に約30年間、脱原発も訴えてきました。

今回の原発事故後の対応について、水俣病との共通点をく左表『10の手口』>にまとめています。特に「責任逃れ」「曖昧な情報流し」「被害者切り捨て」、「被害者の対立」は繰り返してほしくないかと憂慮されています。



▲『10の手口』は経産省前のテント村で考えたと話すアイリーンさん。

▲2012年2月27日『毎日新聞』夕刊より

## あの避難の緊急時 あなたがたい救援の手が

◆ 昨年の大震災の時、被災した私たちに様々な救いの手が差しのべられ、今思い起こしても感謝の気持ちで胸があつくあります。  
◆ 例えば、三月十六日朝、「国にも県にも見捨てられた南相馬市に支援を」とNHK・TVで訴えた桜井勝延市長に、その十分後「南相馬市の被災者をいくらでも引き受ける」と電話で応えた新潟県知事泉田裕彦知事のこと。  
◆ さすが宿敵武田信玄に塩を送った上杉謙信(景虎)のお国から、と感嘆させられました。



7月23日  
月曜日

◆ またへ左の投書は群馬県に避難した方のお話で、群馬県の代表紙『上毛新聞』七月二三日に掲載の会員・二上さんのものです。

### 薬剤師の派遣 温情に感謝

二上 英朗  
(福島市・59)

昨年3月16日の福島第一原発爆発直後の恐慌状態で、福島県南相馬市から行方も知らされずに16台のバスが四方八方に出発した。南25地点の原発から放出された放射能汚染を逃れるために、最後の脱出バスが出るの知らされ、市民は着の身着のまま恐怖のうちにバスに乗り込んだ。夜間に混乱する町々を通り、このうち260人が草津温泉へと連れて行かれた。私の実家は南相馬市で、7月の連休にその道をたどって群馬へ逃れた人々の足取りを訪ねて現地まで出てみた。群馬県内から5人の薬剤師が草津に緊急派遣され、被災者一人一人から常備薬の有無を確認し、入手できる薬局を紹介するなど、目覚ましい活動を展開してくれた事実を知ったからだ。緊急事態で、常用する薬を持って出るのも困難だった。私の叔母も母も地震で引き出しが開けられず、常備薬を持たぬままに避難した。私の住む福島市でも医療現場はパニックで、南相馬市からの被災者は「放射能を検査したか」と診察さえ拒否されたのが実態だった。それに比べて、草津での対応は地獄で代った。家族の小旅行で、どこに行くよりも「まず群馬へ」と思った。草津町民と薬剤師協会に心から感謝申し上げます。



**読者からのお便り**

**今も放射能が放出か？**

半年前、浪江町の小中学校をモデル地区として除染をしました。確かにその時、放射線量は毎時2~3マイクロシーベルトに下がりました。しかし最近その線量は戻りつつあります。周囲は除染していないので意味はないのです。山も除染が必要です。国では家屋の周り20メートルの山しか対象にしています。山全体の除染は考えていません。できないのでしょうか。

また友人から聞いたのですが、実際に原発で作業をしている人の話では、「東電原発1号機の建屋に放射能を外に出さないようにカバーを掛けたが、放射能が充満するため、中で作業をするには時々窓を開けて放射能を外に出している」とのことです。それが放射能の線量が下がらず戻りつつあるもう一つの原因のようです。7月25日の新聞に、「10都道府県でストロンチウム90観測」の記事、なぜ今になって発表するのか。もっと早く東電も国も情報を公表しないのが悲しいです。怒りたい。(浪江町 Yさん)

**地元紙ももう大震災のことを忘れている**

福島民報や福島民友の投書欄を見ると、もはや震災も津波も原発もテーマとして新しくないということなのか、殆ど掲載もなく、2年前の状態に戻ってしまい国会への揶揄(やゆ)、日常生活の喜怒哀楽の話など、つとめて日常的な風を装ったものばかり。商業新聞の性とはいえ、誠に寒々とした印象です。被災地の地元新聞なのに。(原町区・会員 Sさん)

**福島第一原発の現状**

(温度は26日午前11時現在)

|       |         | 1号機                                | 2号機                | 3号機                                  | 4号機   |
|-------|---------|------------------------------------|--------------------|--------------------------------------|-------|
| 原子炉   | 燃料の状態   | ほぼ全量格納容器に溶け落ちた可能性                  | 半分以上が格納容器に溶け落ちた可能性 | 事故時は定期検査中のため燃料なし。爆発は3号機から流れ込んだ水素が原因か |       |
|       | 冷却方法    | 循環注水冷却<br>(原子炉から漏れた放射能汚染水を処理して再利用) |                    |                                      |       |
| 燃料プール | 水温      | 21.5度                              | 22.9度              | 22.3度                                | 31度   |
|       | 冷却方法    | 循環冷却                               |                    |                                      |       |
|       | 燃料集合体の数 | 392体                               | 615体               | 566体                                 | 1535体 |

(▲表は、5月27日『朝日新聞』)

**細野大臣の視察などはパフォーマンス 政府も東電も4号機の危険性の認識なし**

5月26日細野原発事故担当大臣が、世界中が注目する福島第一原発4号機に視察に来ました。それは安全をアピールするパフォーマンスであることはご存知だと思います。

京都大学の小出裕章氏、米国の専門家アーニー・ガンダセン氏、元駐スイス大使村田光平氏、元東芝の後藤氏、東電の協力会社の社長さん、米上院エネルギー委員会の有力メンバーのロン・ワイデン氏など、4号機の危険性を訴え続けています。

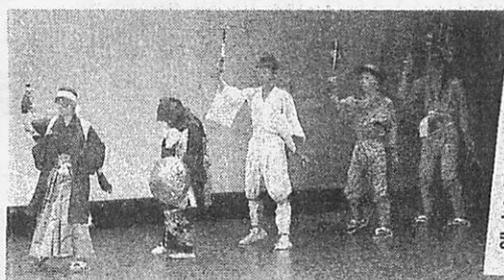
私も衆議院議員の石原洋三郎氏に4号機の危険性を訴えましたら、石原氏からFAXをいただきました。「建屋が傾いていないことを確認しました」「余震に対する耐震性を確認しました」「燃料の取り出しを着実に進めます」「使用済み燃料プールの底部を補強しました」というFAX5枚です。政府も東電も4号機の危険性を認識していません。

(南相馬市原町区・会員 Mさん)

**「九条の会」呼びかけ人**

**三木睦子さん死去(95)**

故・三木武夫元首相夫人で護憲運動や、女性の政治参加の活動、また「九条の会」呼びかけ人のひとりの三木睦子さんが、7月31日亡くなりました。呼びかけ人の小田実、加藤周一、井上ひさしさんも亡くなりましたが、私たちはそれを乗り越え強く進んでいくしかありません。



はばたけ 高校生 高松文祭とやま

**＜相馬農業高校の郷土芸能＞ “宝財踊り”よみがえる**

8月8日から富山県で開催の「第36回全国高校総合文化祭」開会式に、被災した相馬農業高校郷土芸能部が招待され、伝統の「宝財踊り」が福島県代表として披露されました。「宝財踊り」は南北朝時代北畠頭家の主従たちが座頭や賽振りなどに変装し、霊山から鹿島区の日吉神社に落ちのびる姿と伝えられ、独特の踊りやあの哀調をおびた笛の音も相馬人には懐かしいものです。

(写真は8月9日『朝日新聞』)

**劇映画『日本の青空』・**

**『いのちの山河』に続く第3弾**

**渡されたバトン(仮題)**

**～さよなら原発～**

脚本 ジェームズ三木 監督 池田博穂 製作 小室皓充  
地縁血縁に縛られる過疎化の田舎町ながらも、25年間かけて、全国初の住民投票により「原発建設を拒否」した新潟県巻町の劇映画で、この夏クランクイン。本会事務局にもその製作協力の依頼がきています。